

吏への輕侮、職務の輕視などがみられるが、それらも官僚に對する否定的意識の現れといえないこともない。

このような現象を、六朝時代の皇帝權力のありかた、君臣關係、門生故吏の關係などと關連させ、官僚制的形態をとる貴族制の特質と、官僚制的支配の性格を検討してみたい。

ティムール朝末期の社會における

神秘主義詩人ジャーミーの位置附け

久保 一之

神秘主義詩人ジャーミー Nur al-Din 'Abd al-Rahmān Jamī (一四一四—一九二二)は、ペルシア文學史上傑出した存在であり、その作品は早くから文學研究及び思想研究の對象となっている。しかし、ジャーミーに關しては、著述活動以外でも、ティムール朝や周邊諸國の支配層との親交、ナクシュバンディー教團への歸屬、マドラサの建設などがよく知られており、當時の社會を考える上で、彼の社會活動・社會生活が重要な研究對象であることは明かである。

考察のための史料としては、著名な年代記史料や聖者傳に加えて、これまで十分には利用されていないジャーミー傳や書簡集が擧げられる。特にウルンバーエフによって發表された、ジャーミーの自筆とされる書簡集からは極めて興味深い情報が得られる。これら諸史料から裏附けられる事實の概略は、以下の如くである。

ジャーミーには免稅特權が與えられており、君主等による金品の

下賜も頻繁に行われた。従つて確固たる經濟的基盤を獲得していたが、如何なる官職も保持したことはなかった。それでもジャーミーは、君主や宮廷の實力者と親交を保ち、公正な政治が行われるよう積極的に働きかけた。第三者の訴え・嘆願を宮廷に取り次ぎ、官吏の任免においても便宜を圖ろうとした。また、就學者やダルヴィーシュ、あるいは庶民の利益が守られるよう盡力した。

ジャーミーの發言力を過大評價してはならないが、直接・間接に宮廷と接觸し、影響を及ぼし得たのは確かである。これはジャーミーが宗教的權威として無視できない存在であつたことによると思われる。そのあり方は明かに有力ウラマーとは異なっている。

フィトラトの『東方政策』について

小松 久男

ペレストロイカ以後の急激な變動の中で、ソ連中央アジア地域の歴史はいま大きく書き換えられようとしている。それは近現代史、とりわけ二〇世紀初頭からロシア革命期にいたる時代の諸問題について顯著である。ソ連時代には利用が不可能であつた史料の發掘、公刊も着實に進みつつある。今回紹介する『東方政策』も、このような新しい史料に屬する。これはトルキスタンの指導的な知識人フィトラト(一八八六—一九三八)が、内戦下の状況の中で著した政治的なパンフレットであり、一九一九年にブハラ・ハン國の革命組織「青年ブハラ人」黨委員會によって刊行された。ここにいう「東

方」とは何よりもマグレブからインドに及ぶイスラム世界を意味しており、フィトラトはここでイスラム文明の榮光と衰退、ヨーロッパ帝國主義 (Jiangrik) の植民地と化したイスラム世界の慘狀、第一次世界大戰後の「東方」をめぐる國際情勢、そして解放の條件としての「東方の統一」とソビエト政權との共闘の意味を明快に論じている。『東方政策』は、たしかに革命期に特有な宣傳文書の一つではあるが、その中にはガスプリンスキーやアブデュルレント・イブラヒムら、ロシアにおけるイスラム改革主義の先達の論理と精神が繼承され、またソビエト政權に對する自立的な立場が示されていることは注目値する。この小冊子もまた、トルキスタン人フィトラトの肖像を描くには有用な史料となるであらう。

イブン・ジャマアアの教育論

——中世のイスラーム教育のあり方から見る
ウラマーの社會的地位の變化——

湯 川 武

本發表でとりあげるイブン・ジャマアアは、マムルーク朝時代前半を代表する高名な法學者であり、長年にわたってマムルーク朝支配下のエジプトのシャフイー法學派の大カーデーイ (法官) を勤めた人物である。有名な政治論をはじめとして、彼には多くの著作があるが、ここではマドラサ (イスラーム法を中心に教育する學校) における教師と學生のあり方を論じた *Tadhkirat al-sami'* と

いう教育論の著作を通じて、ウラマー (イスラームの學者・知識人) がどのように養成されていたかを検討することとする。

Tadhkirat を一讀して感じられることは、教える側にも教えられる側にも、かなり形式主義的な作法が求められていたということである。教師と學生のあるべき姿は、さまざまな面で捉えうるが、イブン・ジャマアアはもっぱら外面的なことや技術的なところに關心を集中しており、知的關心の廣がりとか深化をどのように計るかについては、ほとんど言及していない。

このイブン・ジャマアアの著作の検討からさらに進んで、この時代のイスラームの學問やウラマーのあり方も検討する。高いレベルの教育についての議論において、學問の内容や教育の本質論よりも、このような外面的形式的な事柄が先行することは、當時の學問のあり方、そしてウラマーのあり方自體が形式化し硬直したものになりつつあったことを反映していると考えられる。

辛亥革命と蘇州農村

夏 井 春 喜

近年、中國の資本主義的發展、ブルジョアジーの成長等の「都市」的側面からの辛亥革命研究が行われ、その意義が高く評價されている。辛亥革命が農村において如何なる變化をもたらしたのか。

本報告は、租稅簿冊資料及び新聞記事等の文獻資料に基づいて、辛亥革命時期の江南蘇州農村の地主——小作關係の變化を具體的に解明